故郷第六場面　読んだ読んだ

三年三組　氏名

彼は後ろを向いて、「シュイション(水生)、だんな様にお辞儀しな。」と言って、彼の背に隠れていた子供を前に出した。これぞまさしく三十年前のルントウであった。いくらかやせて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違いはあるけれども。……夜はまた世間話をした。とりとめのない話ばかりだった。明くる日の朝、彼はシュイションを連れて帰っていった。

ルントウは変わった。それは、子だくさん、凶作、兵隊、地主、重い税金などのせいだった。昔のような神秘の宝庫はなく、タメロから敬語に変わり、身分や立場をわきまえ、でくのぼうとなってしまった。

そしてルントウは、人の下にくっついていないと生きていけない人柄となってしまった。また、主人公も、昔と違うルントウを見て、ショックもあったが、「昔と違うルントウには興味がない」というように下に見て、「神秘の宝庫」ではなく、「でくのぼう」と思ってしまっていた。母もまた、主人公と同じように、下に見るようになってしまっていた。

さん

ルントウは、敬語を使ったり、自分から生活が苦しいという話をしたりして、主人公の同情を誘い、物をもらいに来るような、欲深い人に変わってしまった。また、子供の頃は神秘の宝庫のような心を持っていたが、今までは立場が上の人に頼らないと生きていけない、でくのぼうになってしまった。

主人公と母は、そんなルントウを見て哀れみ、持っていかぬ品物はみんなくれてやろうと言った。昔はルントウにあこがれて上に見ていた主人公だったが、変わってしまったルントウの姿を見て、下に見るようになっていた。

さん

ルントウは、子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主といった生活苦から、人の下にくっつき、誰かの言いなりにならないと生きていけなくなり、人としての面白味が欠けてしまった。そのため、神秘の宝庫だったのも、でくのぼうのようになってしまい、主人公と母はそんなルントウに同情し、家の品物を好きなように選ばせた。しかし、それはルントウの策略で、自分が今置かれている立場を話したのも、物をもらうためだったのかもしれない。

さん

昔は主人公の方が立場は下だった。それが、今は逆になっている。昔のルントウは神秘の宝庫で、主人公のあこがれのような存在だった。しかし、タメロだったのが敬語で話すようになったり、税金で苦しめられたりして、生き生きとしたルントウの姿はもうなかった。そんな生活に苦しめられているルントウは、主人公の家を訪ねるふりをして、物を取りに来た。そのルントウの本当の目的に、主人公とその母はまだ気付いていない。

さん